



タイ王国

【言語事情】

タイ王国の公用語は中部方言を基盤とする標準タイ語です。東北部方言はラオ語、北部方言はユアン語と呼ばれ、中部・南部方言のタイ語（シャム語）と区別されることがあります。その他、北部・東北部山岳地域ではモン・クメール系やチベット・ビルマ系の言語が話され、カンボジア国境地域ではクメール語が、マレーシア国境地域ではマレー語が話されています。



【言語文化】

◆身体動作を細かく描写

タイ語には身体部位の動きを細かく描写する基本的な動詞が数多くあります。たとえば日本語では1つの動詞

「押す」であっても、タイ語では、

- ดัน (ダン) 圧力をかけて押し出す
- ดัน (ダウン) 後ろから押す
- รุม (ルン) どんどん押していく

ผลัก (プラック) 突き飛ばす

เสียด (スアク) 押しやる

ไถ (サイ) 押しつけながら平面上を移動させる

เข็น (ケン) 押しながら重い物を動かす

など、いくつもの動詞があります。

ほかにも「切る」であれば、

ตัด (タット) 刃物で切る

เกี่ยว (キアウ) 鎌で切る, 刈る

กริบ (クリップ) ハサミで切る

ซอย (ソーイ) 刃物を小刻みに動かして小さく切る

หัน (ハン) 何かの上に乗せて切り刻む

สับ (サップ) 強く速く切り刻む

เล่ (レー) 刃物を横に寝かせて薄く切る

เชือด (チュアト) 刃物でごしごと切り込む

ผ่า (パー) 縦割りに切り裂く

ทอน (トーン) 部分に切り分ける

บั่น (バン) 短く切断する

เฉือน (チュアン) 一部を切り取る

เจียน (チアン) 望む形に切り整える

ฉีก (チーク) 引き裂く

เด็ด (デット) 指で摘む, 爪で千切る

บีบ (ビット) 指で小さく千切る

ลิด (リット) 伸びた枝葉を切る

ฟัน (ファン) 人を斬る

など、どのように切るか、何を切るかによって、動詞を使い分けます。

日本語と同様、タイ語にも多くの擬態語（「どんだん」「ごしごし」など）があり、特に話し言葉でよく使われますが、これらのタイ語の動詞は、擬態語やその他の様態副詞を伴わずとも、かなり詳しい動作の様態を表せます。

たとえば英語でもタイ語ほどではないにしろ「押す」は push, press, wheel, 「切る」は cut, hash, saw, clip, shear, slice などの動詞があり、先に挙げたタイ語動詞の数の多さに特段の驚きはないかもしれませんが、タイ語にはそれらの動詞よりさらに詳しい身体部位の動きを表す動詞がたくさんあります。

◆顔や頭の動かし方もいろいろ

日本語の「うつむく」「仰向く〔上を向く〕」「うなづく」は、その動詞1語で顔や頭をどう動かしたのかを表現しています。タイ語の ห้ม (コム) 「うつむく」、นอน (ゲー) 「仰向く」、เหิน (パヤック) 「うなづく」も同じです。しかし、タイ語にはこれらのほかにも、

๓๕๓๓ (チャゴーク) 顔を突き出す

๓๓๓ (パゴック) 頭を少し持ち上げる

๓๕๓ (グーイ) うつむいた状態から顔を持ち上げる

๓๓ (ゴー) 寝た状態から頭を持ち上げる



「うつむく」 ← <正面> → 「仰向く」

などの動詞があり、どれも日常的によく使われます。タイ語話者は日頃、人が顔や頭をどう動かすかに注意を払い、その細かい動作を表し分けているわけです。顔や頭の動きに限らず、タイ語話者は人間の動き全般をよく観察し、身体部位をどのように動かしているのかを見極め、その特徴を丁寧に描写します。

◆座ったままお尻で動く

タイの伝統的な高床式家屋に住む人々の食事風景は今も昔も変わりません。床に料理を並べ、家族が車座になって食事をします。そのような田舎の高床式家屋の暮らしではもちろん、都市の近代的な集合住宅の暮らし



伝統的な高床式の家

しであっても、庶民は椅子に座るよりも、床や広い台坐の上で座ったり寝転んだりしてくつろぐのが好きです。そのような床生活の場では、立たずに座ったままお尻を動かして移動することも多く、タイの人々にとってそれは見慣れた光景です。タイ語には、

ห้อย (カヤップ) 何かしようと少し動く, 少し動かす
เขยื้อน (カユアン) 少し動く, 少し動かす
เขยิบ (カユープ) 少し移動する

といった、立った姿勢か座った姿勢かを問わない若干の動きを表す動詞のほかに、特に座った姿勢で若干移動することを表す

กระเถิบ (クラトゥープ) 尻をずらして移動する
ถัด (タット) 尻をずらして前方に移動する
ถด (トット), กระถด (クラトット) 尻をずらして後方に移動する

などの動詞があります。これらはタイの人々の生活様式



お尻をずらして後方に移動中

に根差した、タイ文化の中の基本的な身体動作を表す動詞であると言えるでしょう。

タイ社会で育たず、タイ語を母語としない人がそうした

タイ語動詞の使い分けに慣れるのには相当時間がかかります。よく「タイ語にはややこしい文法がない。名詞や動詞は屈折しないし、語順もあいまいだから、どうにでも単語を並べれば言いたいことが通じる。タイに半年住めば日常会話はできるようになる」と言われます。それはそのとおりだと思います。しかし忘れてはいけないことは、タイの人々の相手を思いやる優しさ、忍耐強さ、そして勘の良さがなければ、タイ語を母語としない我々がタイ語を使ってそんなに簡単に意思疎通できるはずはないということです。また、当たり前のことですが、タイ社会に半年暮らしたくらいでは、到底、タイ語の日常会話の豊かさ、タイ語表現の真の面白さを理解することはできません。

◆姿勢もさまざま

たとえば「先生が教壇で講義する」「学生が図書館で本を読む」など、人の動作を描写するとき、日本語話者なら「講義する」「読む」のように1つの動詞を使って表現するのが普通です。「立って講義する」「座って読む」と言うことは、特に姿勢に注目しているときでない限り、あまりありません。タイ語話者は、บรรยาย (バンヤーイ) 「講義する」、อ่าน (アーン) 「読む」という1つの動詞だけを使うこともありますが、姿勢動詞と動作動詞を組み合わせて、ยืนบรรยาย (ユーン+バンヤーイ) 「立

っている+講義する」, นั่งอ่าน (ナン+アーン) 「座る+読む」と表現することを好みます。寝室で眠るのは นอนหลับ (ノン+ラップ) 「寝る(横になる)+眠る」ですが, 教室で居眠りするなら นั่งหลับ (ナン+ラップ) 「座る+眠る」, 通勤電車でつり革につかまって居眠りするなら ยืนหลับ (ユーン+ラップ) 「立っている+眠る」です。

姿勢を表す動詞を使うことで, 聞いている側は実際にその場面を見ていなくても, 講義したり読書したり眠ったりする人がどのような姿勢でその動作, 状態にあるのかが明確に分かり, 具体的な場面状況が目には浮かびやすくなります。人が身体部位をどのように動かすかを詳細に描写し, さらにその人の姿勢にも言及して全体的な場面状況を想起させる。タイ語話者はそうした話法(コミュニケーションのための思考法)を毎日の生活の中で培っていきます。

タイ語を学習するとき, そうしたタイ語の話法に気づかなければ, いつまで経っても自分の母語の話法に頼ることになり, タイ語らしい表現を身につけることができません。タイ語の話法に気づくための一番の近道は, 教室で勉強するだけでなく, 積極的にタイ語話者のコミュニティの中に入って行って様々なタイ語話者と接し, 彼らの話に耳を傾けることです。場面に応じた分かりやすい表現とはどういうものか。発話状況や話し相手にふさわしい言い回し, 立ち居振る舞いとはどのようなものか。

そうしたことを五感で理解し, 身体で覚えることができます。

【フィールド・ノート】

◇カレン族の村で

バンコクの大学院の言語学科で学んでいたとき, 当時必修科目だった Linguistic Field Methods を履修し, 期末にフィールド・ワークの実習に参加したことがあります。級友とともに担当教員に引率されて北部ラムプーン県のカレン族の村を訪れ, 9日間滞在してカレン語サゴー方言の言語調査を行いました。そのときに初めてフィールド・ノートを作りました。

フィールド・ワークでは級友と組みになり, 二人で一緒にカレン語サゴー方言の呼称語(「あなた」「おじさん」「村長」など, 話し相手に呼びかけたり言及したりする語)について調査しました。私はフィールド・ノートを作ったものの, 音声を聞き取る能力が低かったため, カレン語話者コンサルタントに教



カレン族の村

えてもらった呼称語を正確に筆記することができず、そのフィールド・ノートはまったく役に立ちませんでした。そのとき私が辛うじてできたことは、級友が同定してくれた数々の呼称語をもとに、その語類や語構成について分析し、カレン族の親族体系や社会構造の特徴を考察することだけでした。

初めて訪れた村でタイ語が得意ではないカレン族の村人からカレン語の呼称語を聞き出すことは難しいことです。そこで、村の子どもたちに通訳を頼みました。子どもたちは家ではカレン語を話し、学校ではタイ語を話すバイリンガルです。私たち二人の通訳をしてくれたのは、民族衣装を身につけた快活な女の子でした。私たちをコンサルタントの家に連れて行き、私たちに代わってカレン語で質問してくれました。

彼女の父母や祖父母の世代は、ミャンマー国境付近の山岳地帯で生まれ育ち、その後ここに移住してきました。私たちが訪れたのは、タイ政府が平地に建設した山岳民族のための村だったのです。移住してきた山岳民族の子どもたちは、タイ政府が提供するタイ語による公教育を享受するようになりました。

◇20年が経ち・・・

あのとき通訳をしてくれた女の子は今どうしているでしょう。フィールド・ワークのときに、カレン族の女

性は十代の早いうちに子どもを産んで子育てをすると聞きましたが、もし彼女もそうしたカレン族の伝統になっていれば、もう孫がいてもおかしくありません。あるいは村を出て、習得したタイ語を活かして都市で仕事をしているでしょうか。彼女の子どもや孫は、彼女がそうだったように、民族衣装をまとうて学校に通っているでしょうか。カレン語とタイ語のバイリンガルでしょうか。それともカレン語は聞いて分かる程度で、自在に操れる母語ではなくなっているでしょうか。

しまいこんでいた Linguistic Field Methods の期末レポートを引っ張り出してみると、製版したレポートの青い表紙が色あせていました。20年はふた昔。この20年でラムプーン県の移住村のカレン族の人々に変化があったとすれば、バンコクの大学院生にも変化があっただけです。大学院の後輩によると、今フィールド・ワークの実習は必修ではなくなっているそうです。昼間はフィールド・ワークに勤しみ、夜は体育館のような大広間に蚊帳をつってゴザを敷いて寝る。朝と夕方、野外のドラム缶に溜めた水で水浴びをする。帰りの道中では皆でわいわい観光地にも寄る。そうしたフィールド・ワークをしたくないという大学院生が増えた結果のようです。

私はどうでしょう。20年前の劣等感は、好奇心は、ひたむきさは、別のもの変わったのでしょうか。それとも変わっていないのでしょうか。 (高橋清子)